展望

されど枕詞

水辺あお

枕詞は1200種ほどあるといわれる。そのすべてを枕詞とするかどうかは論者によって異なる。枕詞の原型の大半は万葉集の時代に整い、近代短歌でも多く使われている。

久方のアメリカ人のはじめにしベース
ボールは見れどあかぬかも

かつて正岡子規が、「天」などにかかる「久方」を、「アメリカ人」の枕詞とした斬新な例を作ったように、近代短歌でも枕詞は幅広く使われてきた。

もっとも古い時代に原型ができた枕詞は、その言葉の意味や由来が不明であったり、多様であったりするものが多い。「あしひき（あしびき）」は、「山」などにかかる枕詞として知られるが、「ひき」は「引き」であったり、「痛（ひ）く」であったり、諸説ある。

諸説ある枕詞の語源を、古代の中国語や朝鮮語に求める研究は多い。古代日本社会は、主に中国、朝鮮、日本の三国の文化が融合して形成された文化があり、そのためこの三国の言葉を語源としているともいう。現在の日本語が、外来語や和製英語や数多くの語源を持つ言葉でなりたっているのと類似の構造があったというのは興味深い。

語源が不明であったり多様であったりするためもあろう。多くの受験用参考書には、枕詞はあえて口語訳をしないとある。とはいえ枕詞は、その言葉自体が魅惑的な響きと色彩を放っていて、訳されることはなくとも一首全体における存在感は大きい。

あしひきの山鳥の尾のしだり尾の長々
し夜をひとりかも寝む

百人一首にある柿本人麻呂作とされる有名な歌だ。口語訳すれば、「山鳥の長くたれさがった尾のように、長い長い秋の夜を、私は一人で寝るのだろうか」となろう。枕詞の「あしひきの」は訳さない。しかし、この枕詞を受けて、そのまま「長々し」をみちびきだす序詞となり、「ひとり寝の夜長」を醸しだす。「あしひきの」は単なる字数合わせのための無意味な五文字で終わってはいない。口語訳はしない「たかが枕詞」だが、「されど枕詞」なのだ。

これらの多くの枕詞のなかで、個人的に気になっているのが「梓弓」と「いさなとり」である。

「梓弓」は、本来は武具のほか、神事などに用いられる梓の丸木で作られた弓であり、枕詞としてのみならず、「梓弓」そのものとして詠まれることもあった。長歌であるが、万葉集巻1の2には「み執らしの梓の弓の中弭の音すなり」とあり、梓弓が枕詞ではなく、実際に使われている弓として詠われている。本来の意味をもって用いられていた言葉が枕詞になっていく過程を残しているように思える。

「梓弓」は、万葉集以後「引く」、「射る」、「張る」など多くの語にかかる枕詞として、古今集や新古今集でも見られる。近代でも「張る」の音から「哈爾濱」の枕詞となった例もある。息長く、かつ幅広く使われてきた枕詞のひとつといえる。

他方、「いさなとり」は、鯨をとる意味がある。「海」、「浜」、「灘」にかかる枕詞だが、万葉集以後の用例を見ない。万葉集巻2の153には「鯨魚取り近江の海の沖放けて」の長歌がある。「近江の海」は琵琶湖のことで、琵琶湖に鯨がいたとは思えないが面白い。ただ、万葉集以後には用例を見ない枕詞であるのが残念だ。いつか使ってみたい。